

巻頭言

「協同」を問い続けた協同総合研究所の25年

相良 孝雄 (協同総合研究所 事務局長)

協同総合研究所25周年記念集会を準備してきた立場から巻頭言を記したい。

1991年3月23日に130の方が全共連会館に集まり、協同総合研究所の設立総会を開催した。それから25年、2016年12月3日に、池袋ISPタマビル8階の日本労協連会議室で協同総合研究所25周年記念集会を92名の参加で開催した。25年間で協同総合研究所(以下協同総研)は事務所を6回転居し、研究活動を行っている。

協同総研は25年の間、「協同」を問い続けてきた歴史であった。1991年はバブルが崩壊し、ソ連が崩壊し、EU(マーストリヒトで首脳合意)が成立するなど、崩壊、統合が世界中で行った年に協同総研は生まれた。研究所の歴史は、「協同の発見誌」「研究会」「本の出版」「委託研究」「海外交流」を通じて研究の成果を積み重ねたものである。そしてよい仕事を通して市民主体の社会づくりの担い手である労働者協同組合(協同労働の協同組合)発展のために、考えるべき課題や焦点を社会状況を鑑みながら研究してきた。

記念集会を迎えるにあたり、過去の「協同の発見誌」、「研究会」のレビューを中心に振り返る機会を持てたことは、今後の研究所を運営する意味で多くの示唆をいただくものとなった。それは協同組合研究、非営利・協同セクター研究、協同労働の協同組合の研究に留まらず、「ともに心と力をあわせ、助け合って仕事をする事」(「協同」:広辞苑)を通じて、市民が主体となり、よりよい社会をつくるために、人の変化と成長を基盤におき、「地域づくり」「運動・事業づくり」「組織づくり」のあり方を総合的に研究してきた歴史であることに気付けたことである。それとともに、今まで以上に協同総研がダイナミックに研究活動を進めていきたいと感じた。

1987年に静岡県伊東市で開催した「いま『協同』を問うプレ集会」から、30年の節目となる来年、全国協同集会を滋賀県で開催する。87年の伊東での全国協同集会の集会名は「いま協同を問う」をテーマにし、2000年集会から「いま協同が拓く」、2012年集会からは「いま協同が創る」と変遷し

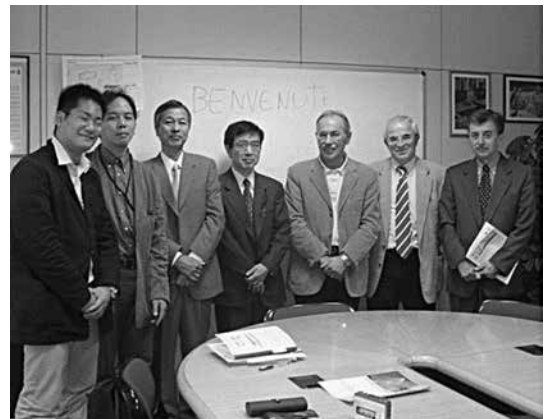
ていった。それは問うだけではなく、自らが主体となって地域や社会をつくることに焦点をおき、行動に移して事実を変えていくことの重みとワーカーズコープの実践が深化した証でもある。研究所は「協同の意味」を問い続けることを第一に考えるとともに、より「実践と研究が融合する場を創ること」をしていきたい。

研究とは「よく調べ考えて真理を究めること」(広辞苑)とある。「究める」とは「①極限に達せさせる。果てまで物事をおしつめる ②深く追求して物事の本質や真相をつかむ」(広辞苑)とある。締切に追われるなかで、本当に本質や真相をつかむことが自分自身できているのかを反省しつつも、先人たちが研究をしてきた「協同」に関わる本質や真相に迫る論考は、人と人、人と自然、人と社会、過去と現在と未来の時間を超え、交差しながら、「協同」の研究成果を紡ぎ出している。

これからの大きな研究テーマの1つとして「協同労働の協同組合の(法制化後の)地域化・社会化」の研究とは何かを問う時代に入っている。具体的には、市民が協同労働により仕事を立ち上げることのプラットフォームづくりがある。先人たちがつってきた25年の研究成果を土台として、現実の社会で活かし、事実を持って社会的困難を変えることに貢献できる研究所を目指していきたい。

個人的な話になるが、協同総研が50周年を迎えるときには、私は62歳となる。生きている限り、協同総研の会員を続けているだろう。これから先の25年をつくる当事者として、先人の方々の取り組みに、敬意を持ちながら、「協同」の本質や真相に少しでも迫ることに挑戦し続けたい。その過程では、協同労働の協同組合を研究する若い研究者・実践者が研究・調査・交流するプラットフォームづくりは不可欠である。

協同を問い、協同を創り、協同の価値が社会変革の大きな力になるための「協同の発見者」になれるように努力したい。



(著者が26歳のとき、イタリア社会的協同組合調査でご同行させていただいたときの写真。菅野正純さん、菊地謙さん、川地素睿さんなど諸先輩方に大変お世話になった。写真はレガコープボローニャで。お世話になったことを次世代に継承していきたい。) [協同の発見誌161号から]